

楽しく

2 行書の「省略・筆順変化」を動的・静的な視点から追究しよう

上越教育大学附属中学校指導教諭 清水陽一郎

さまざまな実践をされている清水先生の連載（全三回）です。今回は、模型や動画を使って、行書の特徴（点画の省略・筆順変化）を学ぶ授業をご紹介します。



しみずよういちろう
清水陽一郎
1970年生まれ。東京学芸大学書道科卒業後、新潟県中学校教諭を経て、上越教育大学大学院にて書写指導について研究。現在、上越教育大学附属中学校指導教諭。全国大学書写道教育学会会員、上越国語教育連絡協議会書写委員。

1 題材の目標

- ・行書の特徴である「点画の省略」「筆順の変化」が起こる理由に興味・関心をもつ。
- ・動的な視点から「点画の省略」「筆順の変化」を捉え、運筆練習を繰り返して、技能の向上を図る。
- ・「点画の省略」「筆順の変化」が起こる理由や運筆の過程を静的視点と動的視点を結び付けて思考し、理解する。

2 学習の流れ

- ① 楷書と行書の違いを確認する。
・本時の目標を知る。
「点画の省略」「筆順の変化」が起こる理由を考え、その特徴が表れるように筆使いを追究しよう。
- ② 行書の書字時間が短縮される理由を考え、発表する。
・水平面と垂直面の両面で運筆距離が短くなることを、模型と動画を見て確認する。

- ③ 動画で連筆（動的視点）を、手本で字形（静的視点）を、それぞれ確認し、結び付けながら練習する。

① 楷書と行書の違いを確認しよう

最初は復習から始めました。「楷書と行書の違い、説明できますか」と、電子黒板で教科書P22・27の「緑」を提示して問うと、生徒は近くの席の生徒と確認のための話し合いを始めました。「発表できる人はいますか」と問いかけ



▲教科書の紙面を映して見せ、楷書と行書を比較させる。

けると、数人の生徒が「行書は点画が連続している」「行書は点画や折れが丸い感じ」といった特徴を挙げました。

しかし、特徴はそれ以上挙がってきません。そこで、「楷書と行書を空書して気づいたことを挙げてみましょう」と指示を出しました。生徒は「一斉に空書を始め、周りの生徒と相談しています。そのうちに、数人の生徒が「いとへんは一目の折れの向きが変わって二画目に連続した」「いとへんの下部分『小』が全部点になった」「『小』は筆順が変わった」といった特徴を挙げました。

そこで、生徒に教科書の観音開きの

ページ（P23～26）を広げるように指示を出しました。そして、行書の特徴である「点画の省略」「筆順の変化」について学習することを確認しました。

② 行書の書字時間が短縮される理由を考えよう

次に、「行書が使われる理由は何ですか」と問いかけました。これに対して、ほとんどの生徒が口々に「速く書けるから」と答えました。行書はなめらかに書くため、結果としてスピードは上がりませんが、私は、生徒たちが「書く速さ」だけに気をとられないようにしたいと考えました。そこで「なぜ速く書けるのでしょうか」と尋ねると、生徒は一瞬沈黙し、その後、周りの生徒と相談を始めました。

ここで、一年生で学習した「いろは歌」と平仮名の字母を想起させ、「平仮名はなぜできたのか」「字母はどのように平仮名へ変化したのか」ということを考えさせました。すると、ある生徒が「平仮名は漢字の点画が省略されてきたものだ」と発言しました。そこで、私が「省略によって何が変わってくるのか」と追質問をすると、少し沈黙があった後、「わかった！動く距離だ」とある生徒が発

言しました。

そこで、自作の模型（左写真）を取り出し、「これにひもを通して、長さを比べてみよう」と提案しました。生徒は興味津々で見入っています。教科書P40～41にも掲載されている「禾」と「花」の実画部と虚画部を含む運筆距離（ここでは垂直面は考慮しない）をひもで測り、伸ばして長さを比べると、行書のほうが10～40％程度短いことが目視できました。生徒は驚きの声を上げ、同じスピードで書いても結果的に速く書けることに納得していました。



▲板に釘を打った自作の模型。写真のように、ひもを通して、運筆距離について考えさせる。

▶教科書の教材文字と、タブレットPCの動画を見ながら、学習する。



▲2観点とも達成できた生徒作品。

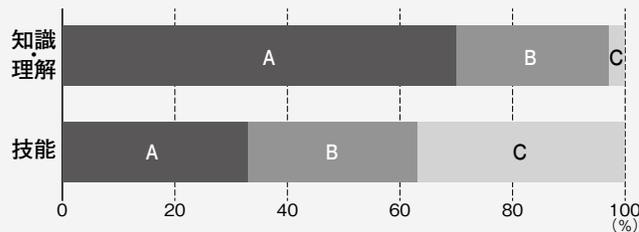
今回の学習を、「知識・理解」「技能」の二つの観点から三段階で評価しました。評価結果を以下に示します。

全体的な傾向として「頭で理解していても手が思うように動かない」生徒が多いことがわかります。動的視点と静的視点を提示したことで、生徒は双方を結び付けることにより、省略や筆順変化の理解を深めることができました。しかし、練習時間が短いため、技能の向上にまでは至っていません。練習時間を確保するためには、国語の単元配列を工夫して、書写の時間を定期的あるいは短期集中的に設定することが大切だと考えます。

3 学習の評価

「桜草」の評価 n=39 2012年7月実施

A 十分達成できている B 概ね達成できている C 達成できていない



【知識・理解】

- A：省略と筆順変化の双方を正しい形で文字に表すことができる。
- B：省略または筆順変化を正しい形で文字に表すことができる。
- C：省略と筆順変化の双方を正しい形で文字に表すことができない。

【技能】

- A：なめらかで筆脈の通った運筆ができている。
- B：筆脈の通った運筆ができている。
- C：筆脈の通った運筆ができない。



▲模型にひもを通してその長さを比べ、行書の運筆距離が楷書よりも短いことを視覚的に捉えさせる。

▼楷書は「トン・スー・トン」と書き、ストップ&ゴーがあるが、行書は止める部分を止めずに速度を落として書く。

▼行書は穂先をほとんど持ち上げずに書く。浮き上がりが少ないので、結果的に連続痕が紙に残る。

▼行書はなめらかに書字運動をし、運筆距離が短くなるために、点画の形が変化・省略したり筆順が変化したりすることがある。

そこで、私は、それまでの学習を書字運動の視点からまとめました。

③ 動画と手本を効果的に使って 行書を練習しよう

続いて、教科書P43の「桜草」を実際に筆で書く練習に移りました。教科書の教材文字では、字形や点画の形を確認できますが、点画と点画の間を筆がどのように動いているかまではわかりません。そこで、教師が書いている様子を、上からと横からの二方向から映した動画を電子黒板に映しました。その際、「書字運動の結果として文字が残るのだから、よい運動をすればよい字になる。字形も大切だが、書字運動と関連づけて観察を「しなさい」と指示を出しました。生徒は、教科書と動画を交互に見ながら、書字運動のイメージをつかもうとしていました。

学級全体での確認が終わり、個々に練習を始めました。生徒は、一人一台持っているタブレットPC(※)を使い、上からと横からの二方向からの動画を必要に応じて使い、教材文字と照らし合わせ、動的視点と静的視点の両面から練習を進めました(タブレットPCがない場合、デジタルカメラの動画機能を使って代用できます)。自然発生的に、隣どうしで動画と相手の書字を客観的に観察し

▶教師が書いている動画を見せ、画面部の筆脈の変化を確認させる。

合い、アドバイスをし合う生徒たちの姿がありました。最後に、行書で名前を書き、提出させました。

※ タブレットPC 薄い板状のパソコンで、画面上で操作したり書き込んだりできる。(上越教育大学附属中学校では、総務省/文部省の事業の実施校として、全生徒にタブレットPCを配布、授業で活用している。)

